

入選

「小さな親切」作文のつながり

熊本県 鹿北小学校
3年 中村大雅

ぼくは2年生のとき、「小さな親切」の作文でゆうしゅう賞をいただきました。その作文には、ぼくが体調をくずしたときに、家族や先生、友だちがやさしく声をかけてくれて、みんなのおかげで元気になって助けられたことを書きました。

ある日、お母さんが、「そうだ、この作文を病院の先生にもわたそうか。先生のこと書いてるし、いつもお世話になってるから。」と言いました。

病院へ行く前にぼくは、感しゃのメッセージをふうとうに書いて、その中に作文を入れて持って行きました。いざ先生を前にして、わたすとなったら、なんだかはずかしくなっていました。だけど、いつもの感しゃもこめて先生に「いつもありがとうございます。」と言って、ふうとうをわたしました。先生ははじめ、「えー、何、何？」とびっくりした様子でした。

お母さんがじじょうをせつめいしたら、先生はにっこり笑って、「ありがとう。後で読むからね。」と、うれしそうに受けとってくれました。

その帰り道、お母さんのけいたい電話に、病院から電話が……。 「何だろう。忘れ物したかな？」と電話に出たら、「今、作文読みました。とっても上手に書けてるね。ありがとう。」と先生からの電話でした。ぼくは、先生が仕事が終わってすぐに作文を読んでもくれたこと、そして「ありがとう」のお礼の電話がきたことがとてもうれしかったです。先生の言葉を聞いて、なんだか心が温かくなりました。

そしてその後、病院へ行くことがあったとき、うけつけに何かかざってあると思って見たら、それはなんと、ぼくが先生にわたした作文でした。がくぶちに入れられて、きれいにかざってありました。こんどはぼくが、びっくりしました。と同時に、うれしさがこみ上げてきました。

「こんなに大切にもらえるなんてありがたいね。」家族も自分のことのようによろこんでくれました。

病院では、先生やかんごしさんがいつもやさしくお話ししてくれます。しんさつのとき、人体やぞうきのはたらきにもきょう味があるぼくは、レントゲンのしゃしんがはってあつたりすると、いろいろ聞きたくなります。すると先生は、「どんなことでも聞いていいよ。」と言ってくれて、ぼくがしつもんすると、本だなから絵がついた本を聞いて見せてくれて、分かりやすくていねいに教えてくれます。

たくさんかん者さんもいて、忙しい中なのにいやな顔ひとつしないでいろいろ教えてくれる先生。しんさつ待ちで聞こえてくる先生やかんごしさんの声は、いつも明るくて安心します。ぼくは、たくさんいるかん者さんの中の1人でしかないけれど、そんなぼくにもやさしくよりそってくれる先生やかんごしさんがいるこの病院が大好きです。小さな親切の作文から、こんなつながりもできるのだなと感じたできごとでした。ぼくも先生みたいに、一人ひとりとのつながり大切にしていきたいです。

ぼくは、この病院や先生たちと出会えて幸せです。